

書 評

柳川市史編集委員会編：

『地図のなかの柳川—柳川市史 地図編—』

柳川市 1999年11月本編 A 4 版360頁

別刷編（別刷図54枚，別刷図解説53頁）

7,500円（税込み・送料別）

はじめに

詩人北原白秋を生んだ、水郷の城下町として有名な柳川市には、昭和60（1985）年10月に開館した柳川古文書館（以下、文書館）があり、地域の史料を調査収集して保存や公開に大きな成果をあげてきた。この文書館を拠点にして平成5（1994）年に柳川市史の編纂が開始され、平成11年に第1巻目として収録の古地図を中心に『地図のなかの柳川—柳川市史 地図編—』が刊行された。

文書館には多くの貴重な図があるにも関わらず、地図研究やそれを利用した地域研究もあまり行なわれていない。こうしたことから、貴重な図群とその研究をまとめた本書の刊行を待ち遠しく思っていた。そして、あしかけ3年をかけて本書が編まれ発刊された。収集された図は、本書に付された目録によると実に1,094件にも及んでいる。また、活動の場が文書館という利点を活かして、現物の図を見ながらの研究会が21回も行なわれたという。まずは、関係者の努力と熱意に対し深い敬意をささげたいと思う。

本書の構成は、『本編』と『別刷編』で構成されている。『本編』は口絵、総説、出所解題、各論、目録からなり、『別刷編』は1枚刷りの複製図51葉、作成図3点とその解説書からなる。また、各論の19編の論文は、「一史料としての地図」、「二国・城・町」、「三水をめぐる空間」、「四地表空間の近代」と大きく4部で構成されている。

本書の特徴は、①「絵図編」ではなく「地図編」とした点。②出所解題やそれに関する論考を所載して史料群の中で図を位置づけ、収集した図の全ての目録を付し、それに従って別刷図が配列され解説されていること。③各図の解説と同時に各執筆者の視点に基づく論文を掲載し、その論者が日本史学、地理学、建築学、文学、美術史と多彩であること。④図全体を1枚仕立ての別刷図を設け、解説図などを付さないことなどであろう。

このように、本書はこれまでにない斬新な視角が随所に織り込まれた新企画といえよう。また、

各論には優れた論文が多いことも魅力である。しかし、斬新であるがゆえに疑問も生じる。本書評では、評者が疑問に感じた点を4つに整理して検討を加えたい。

I 『地図編』という呼称とその対象範囲

多くの自治体史では、本書のような企画を「絵図編」もしくは「絵図・地図編」と称するものが多く、中には寺社や家屋の平面図、橋や堤防の設計図など載せたり、さらには城下町を描いた屏風や大名行列を画いた巻物までも掲載したものもある。こうした設計図や風景絵画などを入れることによって、地図編の幅が広がることにはなる。しかし、評者はこれらを地図と呼ぶことに対して、いささか抵抗を感じ続けてきた。むしろ、現代風にいえば建築や土木の設計図であり、あるいは絵画ともいえるものでもある。

有馬学は、総説であえて地図編とした理由を「『絵図』の定義が一義的でないことである」とし、続けて「曖昧な『絵図』概念を使用することで、近代図とそれ以前の地図に段階的な差をもうけてしまうこと（差がないというのではないが）、さらにそのことによって古地図のもつ「概念」としての多様な豊かさを見失うことを避けたいと考える。本巻では古地図と近代図をも連続的に地図として考える立場をとっている。」としている。

この有馬の意見には、賛同するところである。しかし、本書の山本輝雄「柳川藩における古絵図と建築空間」では寺社や家屋の梁や柱の配置を描いた指図を、中山右尚「柳川明証図会」では柳川城や帷子市の商家を描いた挿絵を絵図と呼んでいる。山本の扱った図は、論題にも建築空間とあるように建築の設計図や平面図であり、中山のそれも景観を描いた絵画とみなされる。はたしてこれらを絵図と呼び、地図の中にも含めることは妥当であろうか。

いずれにしても、曖昧な「絵図」という概念が表出しており、後述のように中野等が地図を「展開構造文字史料」と位置づけたことも含め、「絵図」と「地図」の定義を再検討すべきであろう。

ところで、本書には新たに作成した主題図も所載している。有馬は総説で、服部英雄の「歴史地図を作ること、歴史地図をよみとること」という言葉を引用し、「ここでは地図は、史料として、

対象であると同時に方法である。」としている。これもまた、重要な見解である。本書の題名を『地図のなかの柳川』とした意味がここにあるのであろう。

II 出所解題と地図の分類について

地図の性格を考える場合、その出所は重要な意義を持つことは議論の余地がない。これまでは、個々の図を解説する際に、その伝来を触れられることがあっても、章や節としてまとめられ、しかも収集されたすべての図を含む文書群の出所解題を記述した例は少なかったように思う。本書では、この出所解題が充実しており、地図がなぜその家や所蔵機関に伝来したのか、さらには文書史料との関係も一部明らかにしている。また、自治体史で収集した史料は膨大な量にのぼるが、編集方針に基づいてその多くは所載されないのが通例である。この点でも本書は、収集した図の出所解題や目録を備え、様々なニーズに答えることができ、たいへん有意義である。

さらに、本書に関連して収集された地図は、柳川市域だけでなく柳川藩域を対象にした点も重要であろう。時代によって行政区画が異なり、その支配原理も違っており、時代に応じた範囲で史料を収集すべきものだからである。

一方、中野等「藩政史料中の地図資料」は、柳川藩と立花家の「絵図目録」を中心に伝世過程を論じ、文書群の中での地図史料の位置を検討している。中野は、本論の趣旨を「地図をいたずらに『一人歩き』させるべきでないという危機感の顕われである。」とする。同感であり、地図を特別扱いすべきではない。

しかし、史料群の中における地図史料の位置を重視してのことかと思うが、史料目録に従って別刷図が配列され、その順序通りに解説が施されている点はやや難点があるのではなからうか。地図の分類を明らかにし、この分類別の解説のほうが理解しやすい。

例えば、正保国絵図の関係絵図は別刷①と別刷②、元禄国絵図は⑬、天保国絵図は⑯、明治の国絵図は⑳とそれぞれが無関係のように配列され解説されている。これらの配列は他の地図にも共通しており、図の種類と時代関係が分かり難い。

国絵図は、江戸幕府の方針で作成されたのであるから、編纂順に解説したほうがよいように思われる。また、城下町絵図も全体図、個別町図などと分類し編年順にしたほうがよからう。このよう

に配列を改めれば、地図そのものと共に景観の変遷についても理解が深まるのではなからうか。少なくとも、幕府撰国絵図、藩撰城下町図などといった解説を設け、これらの絵図がどのような関係にあるのかを別刷図の解説で前置きとして述べるべきである。

III 個別論文に対する検討

本書には、各論として19もの論文が含まれている。従って、評者の興味のある論文のみを検討することをお許し願いたい。

服部英雄「柳川の地名地図」は、有馬が総説で述べるところによれば、当初本巻に所載する計画であった小地名の調査に基づく地名地図の一部を紹介したものようである。条里については、小地名によって従来の説と異なる坪付け案が提示されている。こうした地図が作成されれば、様々な研究に利用できるもので、地名地図の刊行が楽しみである。

平間理香「絵図と絵師」は、元禄国絵図に関係した久留米藩と福岡藩の絵師や柳川藩で活躍した絵師の事跡について論述している。これら絵師達の絵画作品も記されており興味深い。しかし、絵師が描いた地図の色彩や樹木などの描法は、絵画のそれと共通点が見受けられることもある。こうした描画方法をはじめ、顔料や紙などについても具体的に触れていただきたかった。

白石直樹「国絵図と柳川藩」は、正保、元禄、天保国絵図及び享保日本図の編纂事業を要領よくまとめ、その保管や利用についても論及している。この中で、白石は渡辺家史料の「御領内絵図」を正保国絵図の編纂で作成された柳川藩の領分絵図と位置づけた。本図は、紙背に寛保年間（1741～1744）と記されることから、それがそのまま信用されてきた。白石の論考によって、正保国絵図の領分絵図であることが明確にされたことは、重要な成果である。また、注で記している蒲池文書の正保2（1645）年作成の「蒲池与絵図」は、領分絵図の基礎となった蒲池組の図と考えられるという。下図、さらに領分絵図と、編纂される過程の具体的な図は極めて貴重であり、より詳細な検討が進められることを期待したい。

元禄国絵図については、久留米藩や福岡藩の編纂記録を中心に考察している。熊本大学附属図書館寄託永青文庫に筑後と肥後の国境縁絵図2枚と元禄国絵図の編纂記録が所蔵されており、柳川藩と熊本藩との交渉が記されていることも指摘して

おきたい。なお、元禄国絵図の幕府献上を元禄13(1700)年3月22日と記しているが、これは元禄14年の誤記であろう。

以上のように、白石によって幕府撰筑後国絵図の所在や編纂状況が明らかになったので、村名やその村高(石高)、渡し場、一里山、港などの記載内容をもとに、具体的な景観復原研究の進展を図ることが求められる。

平川毅「近世柳川城下図の検討」は、柳川城下町を描いた絵図を分類し、各絵図の作成年代や目的について論述している。しかし、城下町全体を描いた絵図についてはあまり論述されていない。また、これら城下町を描いた絵図は、各町図や町組図を基図として、編集したものもあるようなので、この関係をより深く追求して欲しかった。

中野等「展開構造文字史料としての地図—柳川城下『町小路等絵図』分析」は、その論題が刺激的である。中野は、「端的に表現すると地図も文字史料ではないかということである」とする。

一般的な地図は、まったく文字が読めなくても描かれた山や川、道路、建築物などによっておおよその用いたつ。しかし、「町小路等絵図」の場合は道路と屋敷割りなどが墨書される程度で文字がなければほとんど用を足さない。記号よりも文字に重きが置かれている史料とみなされる。

中野は、展開構造文字史料を展開構造記号史料と置き換えてもよいとする。一般に地図の発生は、文字よりも早いと考えられている。地表の空間を体系的に記号化して地図を描く行為は、人間が基本的に持つ思考とみられる。記号の一部に文字があるのだから、地図を展開構造記号史料と位置づけることは可能かと思われる。

しかし、展開構造文字史料と呼んだ場合、文字を記した巻物や帳簿なども展開する文字史料となる。この中に地図を含めるのはいかがなものであろうか。また、町割図や屋敷図などは図であっても地図といえるのであろうか。確かにこれまで史料に「絵図」と書いてあるからと、安易に絵図と呼び慣わし、それを地図と置き換えてきた。しかし、文字がなければほとんど意味をなさない図の類までも、地図と呼ぶのは十分な検討が必要である。

とはいえ、どの程度の記号化がなされれば地図とするのかと問われれば、今のところ明快に答えることはできない。この点が、曖昧な「絵図」という概念を生き続けさせる要因であろう。しかし、

上記のような図を地図の範疇から除外することは、可能ではなからうか。

伊藤昭弘「洲をめぐる争い」は、筑後川河口の洲や漁場をめぐる柳川・佐賀・久留米藩の争いについて論述している。この論文では、地名の誤認があるように思われる。佐賀藩の主張する漁業権は、平尾(大託間)から「肥後之内大嶋こくぞう」を見渡した西であるとする。この大嶋を現玉名市大島に比定しているが、これは熊本県荒尾市大島ではなからうか。「こくぞう」とは、荒尾市大島にある四山神社の俗称である「虚空蔵さん」と推定される。四山神社の鎮座する山を四山もしくは虚空蔵山と呼び慣わし、この山の北側にある割山が肥後と筑後の境界である。また、明治期に漁業権の目印とされた熊本県荒尾山も、おそらくは同じ虚空蔵山を指すように思われる。こうした争論は各藩の主張を図化すると分かり易い。是非とも添付してもらいたかった。

田淵義樹「絵図でみる柳川藩の干拓」は、地図を年代別にならべて干拓の開発年代を考察した。その結果、柳川藩では江戸後期に藩営干拓があまり行なわれなかったとする定説に対して、5箇所の干拓が行なわれたことを指摘した点は重要である。しかし、干拓面積が小さく、開発が隆盛したとはいえないのではなからうか。また、これらの開発が矢部川河口に集中している点なども考察して欲しい。さらに、付されたほとんどの地図史料の文字が読めないのが残念である。

日比野利信「矢部川絵図の作成と伝来」は、柳川藩と久留米藩の境界をなす矢部川(御鏡川)について両藩が作成した川絵図を詳細に比較検討している。川絵図を作成した久留米藩郡奉行の経歴から宝暦~寛政期(1751~1789)に作成されたことを明らかにした。また、宝暦年間の両藩の水利争論の後に、水利秩序を中核とする農村支配の再編成と呼応した図と位置づけた点は高く評価できる。

小林茂「地形図の変化と柳川の近代」は、明治33(1900)年測図2万分の1地形図(柳川・沖端)を軸にその成立を述べ、地域の景観を論じている。「柳川城下町の変化」、「クリーク農業」、「干拓地」、「鉄道と軌道」と節を設けて、当地域の景観の特徴を要領よくまとめている。さらに、その後の変化を追える地形図をいくつか添付し、景観の写真もあればなおよかった。小林の論考は、地図研究が地図そのものの研究とそこに描かれた景観(地

理的情報)の研究が相互に連動して行なわれるべきであることを示している。

鳴海邦匡「柳川藩領山間地域における資源利用―蒲池寿一文書絵図に認められる旧南木屋村の伐畑について」は、伐畑＝焼畑を描いた明治期の図を検討し、さらには柳川藩の焼畑経営を論じており、多角的でかつ詳細である。柳川藩領の山地景観の特色として焼畑が広がっていたことが判明した。ところで、鳴海が注で示した北野家文書の白木村南部地引絵図、同北部地引絵図には、焼畑の記載が多くあるという。本図は平間や江島の論文にも登場するので、図版を提示していただきたいかった。

江島香「『柳川町地引絵図』の検討」は、明治初期の地引絵図を検討した。三瀧県下の壬申地券地引絵図の現物が確認されたのは朗報である。

明治初期の地籍図は、明治5(1872)年の壬申地券発行に伴った壬申地券地引絵図と、明治8年の地租改正事務局の設置による地租改正地引絵図がある。壬申地券地引絵図や地租改正地引絵図は、全国規模での図の統一が行なわれず、当時の府県単位で作成基準が異なった。所載の壬申地券地引絵図は、三瀧県の指示で作成され、その作成方法を示す貴重な雛形が紹介されている。この雛形には、一筆毎に地押番号・反別・所有者名の記入や地目の色などが示されている。これらが現存する図で守られているか否かは重要なポイントであろう。評者の経験では、地元の市町村に残された図と県に提出された図では様式に相違点がある。これは、地元の図が下図であったり、県に提出したが不備があり返却されたもの、県の方針変更の前と後の図であったことによる。

本論では、地引絵図の性格についての検討があまりない。図版で見る限り雛形の様式が守られていない図もある。これらの図の性格をまずは検討して欲しかった。また、江島は別刷図解説において北野家文書の上宮永村地引絵図を地租改正地引絵図としているが、壬申地券地引絵図との様式的な相違点も述べていただきたい。

IV 別刷図版の仕様に対する要望

学芸員という職業柄か、どうしても博物館などで古地図をみている人を観察してしまう。どうも絵画をみているといった雰囲気である。自分自身を振り替えて古地図を研究した動機を思い出すと「美しい」という感動であったように思う。地図編の魅力は、何ととっても現物に近い精密な彩

色や文字にあらう。こうした意味においてカラーの別刷図版の善し悪しは、地図編の重要な生命線ともいえそうである。

また、もう一つの魅力は、そこに描かれるビジュアルな景観やその記載内容などの情報であろう。地図の図像や文字が鮮明に見えること、場合によっては、くずし字を解読する能力も必要となってくる。

本書は、大型の地図を1枚仕立てで縮小しているので、小さな図像や文字が不明瞭で読み取ることができない場合もある。しかも、解説図も付されていない。小さくて読み取れない箇所や一般の人が解読できない図については解説図を付すか、分割にしてより大きくして欲しかった。

また、こうした1枚仕立ての場合、関心のある図を抜き取って、巡検などに持ち歩くのには便利であるが、探すのに手間をとり、かなり広いスペースがないと全体を広げることができない。さらには、紛失の可能性が高いことも指摘しておきたいところである。

評者も自治体史の絵図編に参画しているので、手頃な大きさと鮮明な写真というのは難しい注文であるということは承知している。しかし、利用者の立場からすれば、それもまた編者や執筆者の腕の見せ所でもある。

おわりに

本書は、これまでの自治体史にない新しい編集方針でまとめられ、地図をめぐる様々な分野の貴重な成果がまとめられている。柳川市域の地域史研究だけでなく、古地図を史料とする歴史地理学にも貴重な成果である。さらに、これからの自治体史の絵図編の編纂に、実に強いインパクトと多くの指針を与えるものとなった。

伝え聞くところによると、柳川市の書店ではベストセラーになっているという。また、発行を記念してシンポジウムが文書館で開催され、本書に所載された地図の巡回展覧会が柳川市はもとより福岡市、大牟田市などでも開かれている。関係各位の本書にかける熱い思いが伝わってくる。また、貴重な図が数多く所載され、論集と解説書までも付されているにもかかわらず、安価な点も見逃せない。是非とも、一読願いたいと思う。

最後になるが、評者の力量不足で編者や執筆者の深い考えが分からなかったのではと心配する。ご寛容いただきたい。

(磯永和貴)